

著者からの紹介

邵丹著

『翻訳を産む文学、文学を産む翻訳

藤本和子、村上春樹、SF小説家と複数の訳者たち』

松柏社、2022

村上春樹という作家の文化的ルーツの一つに70年代の翻訳文化があることを見定めた本書は、実際の翻訳書や若者文化の勃興のもとで誕生した「新たな」文化空間について論を重ね、一種の村上春樹前史という観を呈する。本書の独創性および学術的・社会的意義として、とりわけ、下記の四つが指摘できる。

1. 村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』を問題提起の契機として、日本における「若者文学」が誕生した際に否応なしに刻印された時代性、「70年代性」を明らかにした。「70年代性」は、「翻訳文体の脱構築」および「読者と作者の密な関係性」によって代表される。前者の時代背景として指摘できるのは、70年代において、大きな物語がフェイク、いわば虚構としてしか機能しなくなったため、リアリティの喪失という感覚の変容がもたらされた。その結果、従来の写実主義やリアリズムといった文学的手法がしだいに無力化されていき、そこで、ポストモダン時代の「言文一致」が行われた。旧き「文」が自己革新としてあたらしき「言」を獲得して行こうとする過程において、アメリカ小説の翻訳文体が大きな役割を果たした。後者について言えるのは、70年代に、作者は、読者が仰ぎ見る存在から、いわば、読者と等身大な存在になった。ゆえに、1979年に出た『風の歌を聴け』に「70年代作家」と言われるブローティガンとヴォネガットの影響が色濃く反映されたことに、一種の歴史的必然性が読み取れる。

2. 「翻訳」というパースペクティブから、70年代における現代日本文学とアメリカ文学が有機的に結合するその瞬間を捉えた。その前の状況とえば、『ライ麦畑でつかまえて』との相似から庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』にまつわる剽窃騒動が記憶に新しい。しかし、当初、翻訳調文体と評された村上春樹の登場によって、日本語文学の中にも自意識的に日本語の枠を脱境界する文学の流れが形成されるようになった。

3. 伝統的な文学研究の枠組みを突破し、社会学から「場」や「ハビトゥス」といった有効な概念を積極的に取り入れながら、70年代における越境的な翻訳規範の形成および人的「つながり」の創出について考察した。さらに、インタビューおよび実地調査という研究手法を活用し、本書を出版した時点で、藤本和子や津野海太郎をはじめ、当時の現場証人たちに対して総計12件のインタビューを行なった。

4. 70年代における「文壇的階位秩序」の解体の原因として、文学様式の変容、および、現代読者群の台頭を提示した。村上春樹は、作家になる前に何よりもまず読者であり、アメリカ文学の翻訳家になってからは、さらに、特権的な読者となった。「読者の時代」と言われる70年代において、かつて近代文学という想像的共同体の発生装置の末端に置かれた無力な読者が、「近代読者から現代読者への転移」を経て力を持ち得るようになったことを実証した。

(邵丹)

https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/A_00207.html より転載

SF小説家と複数の訳者たち
村上春樹、
藤本和子、

Dan SHAO 邵丹

文学を産む翻訳

1970年代後半の日本語に、何が起きたのか。
これがどれほどスリリングな話題かを、
村上春樹やヴォネガットを熟読し、
藤本和子の話を聞きにシカゴまで行ってきた
若き中国人研究者が教えてくれる。
キーワードは
「翻訳」。——柴田元幸

松柏社